

15 .鳥になった子どもたち(イゴロット北部)

この地方の最初の入植者たちの間に、よく働く農夫と彼の妻、そして二人の幼い子どもたち、少女と少年がいました。初期の他のイゴロットの農夫たち同様、彼らは食物の根源である彼ら自身の田んぼを持っていました。これらの田んぼは、彼らの最も貴重な必需品であり、一年中、田植えから刈り入れまで、手厚く世話をしなければなりませんでした。

ある時、刈り入れが近づいて、農夫はふたりの子どもを田んぼの見張りに行かせました。それは、彼らの家からふた山離れた所でありました。彼は、子どもたちがもう田んぼの責任を担うのに十分な年齢で、その知識を持っていると考えていました。

うれしくなったその少年と少女は、ついに彼らの父の田んぼに着きました。そこは、数ヵ月後、彼らの新しい家もできる予定の場所でした。彼らの父は、子どもたちが中で生活できる、小さな小屋を作っていました。彼らの仕事は、野鳥や動物が、田んぼの米を食べないように、追い払うことでした。子どもたちは、稲が太陽のもとで熟し、黄金色になって垂れるまで見守るのです、そうしたら、その時、父が来て、一緒に収穫することになるのです。

父は、彼の子どもたちが、その新しい仕事を喜んでいるだろうと考えていましたし、実際そのとおりでした。彼らは、野鳥や動物を追い払うために忙しく働いていました。そして、追い払う動物がない時、子どもたちは、鬼ごっこや他の子どもたちがよくする遊びをしていました。彼らに、自分たちで得られないものは、食べ物だけでした。

数日間毎日、ふたりの母か父が、彼らが元気かどうか確かめるために訪ねて来て、一緒に食べ物も持ってきていました。父は、しばしば、子どもたちのために、鶏や小さな豚を丸ごと捕まえては料理し、米とさつまいもを添えてバナナの葉に包んでいました。しかし、父は狩猟や日常の仕事や鶏や豚の世話に忙しくて、田んぼの子どもたちをフィリピンの神話と伝説 15 .鳥になった子どもたち

訪ねる時間がありませんでした。ですから、食べ物を少年と少女に持って行くのは、農夫の妻の仕事になりました。

しかし、農夫の妻は、信頼できる女ではありませんでした。なぜなら、彼女には近くの農家に愛人がいたのです。いつでも、田んぼのふたりの子どもに食べ物を届ける時、最初に愛人の小さな家に寄りました。農夫の妻と愛人は、子どもたちへの食べ物を、骨と小さな食べ物が子どもたちに残るだけになるまで食べていたのです。そして、多くの場合、農夫の妻は全く子どもを訪ねることをしませんでした。そのかわり、彼女はその時間を愛人と過ごし、そして夫の所へそのまま帰り、夫には、子どもたちは元気で十分に食べている、と告げたのです。

夫は妻が言うことを信じ、子どもたちは元気で、たくさん食べ物を食べている、と思い込んでいました。まさか、妻が彼に嘘を言い、子どもたちは本当にやせこけているとは、知りませんでした。ふたりの子どもは、食べ物が無いのにもかわからず、彼らは見張り、田んぼを守ることを続け、田んぼを出て行ったり、家に帰ったりはしませんでした。

そしてある日のこと、父は畑仕事が早く終わったので、子どもたちに何か食べ物を持って行く、と妻に告げました。妻は夫が田んぼへ行くと聞いて、もし、子どもが彼に、もう何週間も食べ物を受け取っていない、と言ったら、と思うと、困ってしまいました。しかし、彼女は、たくさんの食べ物を持って、ふたつ山を越えて、すぐにも行こうとしている夫を、止めることはできませんでした。

農夫は、長い間会っていない子どもに会いたくて、彼はできるだけ速く歩いて、田んぼに着きました。彼が着いた時、子どもたちは全く見ることができず、大きな声で彼らの名を呼びました。しかし、誰も彼の呼びかけに答えてくれませんでした。「隠れているんだろう。子どもたち。」と彼は呼びました。「私とかくれんぼして遊ぶことはないだろう。お父さんだよ。」しかし、全く応えは

返ってきませんでした。

不安に思った父は、高い所、低い所を探しました。しかし、少しもふたりの愛する子どもの気配はありませんでした。彼らの寝たと思われる小屋を探さざりましたが、しかし、そこにはいません。田んぼを残らず探しましたが、そこにもいません。木々や草むらを探しましたが、そこにもいませんでした。

農夫は田んぼの真ん中に立って、子どもたちの安否に絶望していると、二匹の小さな茶色の鳥が羽ばたいて来て、彼の肩に留まりました。これらの鳥を農夫は今まで見たことがありませんでした。そして、農夫が驚いたことには、二匹の鳥は彼に語りかけたのです。「ああ、お父さん、来るのが遅すぎますよ。」

農夫は自分の耳と目が信じられませんでした。「私の子どもたち。お前たちに何が起こったんだ。どうして鳥にかわったんだ。」

二匹の鳥はさえずりました。「お父さん。私たちは、あなたが命じたように、田んぼを見ていました。最初は、お母さんは会いに来ました。しかし、彼女が持ってきたのは、骨と食べ物の残りかず。それで、かろうじて、おなかを満たしました。しかし、数日後から、お母さんはもう私たちに会いに来なくなりました。わたしたちは、ずっとずっと、待っていました。でも、誰も食べ物を持って来てくれません。あなたも、お母さんも私たちを養ってくれませんでした。私たちはおなかですいて、田んぼの米を食べておなかを満たすしかなかったのです。わたしたちは、食べに食べました。そうすると、私たちには、羽毛、くちばし、かぎづめが生えてきました。瞬く間に、私たちは、あなたが見ているとおり、小さな鳥になったのです。

父は悲しみ、怒りました。怒ったのは、妻が子どもたちに与えるであろうと思っていたものを何も与えずなかったこと、悲しんだのは、ふたりの子どもを永遠に失ったことでした。「赦してくれ！」彼は子どもたちに謝りました。しかし、彼の子どもたちは、赦すも赦さないもありませんでした。彼らは父が彼らの状態には責任がないこと
フィリピンの神話と伝説 15 . 鳥になった子どもたち

を知ったからです。彼は、彼らと別れを告げ、またすぐに会いに来ると約束しました。

そして、彼は、彼らが自由に望むだけ、田んぼの米を食べるように言いました。

悲しみ、怒った農夫は、家に帰り、妻に会いました。しかし、彼女が言った嘘も、ふたりの子どもが今は美しい鳥になっていることも、告げませんでした。

次の朝、農夫は妻に、自分は畑仕事がたくさんあるので、その日は子どもに食べ物を持って行けないことを告げました。妻は従順に、鶏や米やさつまいもを子どものために用意して、バナナの葉にくるみ、田んぼに向かいました。

農夫は大きなナタを石で研ぎ、妻が出て行くのを見ました。妻が視界から消えると、農夫は密かに、十分な間隔をおいて、あとをつけました。彼は妻を追っかけて森を抜け、最初の山のふもとに行きました。しかし、田んぼのある第二の山に行くのではなく、妻は、別の道を行きました。

農夫は密かに追っかけて、小さな家に、確かにやってくるまで見ていました。妻はその家に近づき、愛人が彼女を迎えて、温かく抱き合いました。農夫は、不忠実な妻の行動に驚いていました。しかし、妻と愛人が、手に手を取って、小さな家に入る間、外に留まっていた。

小さな家の内側では、妻は愛人と、子どもたちのための食べ物を食べ始めました。そして、抱き合い、口づけして、お互いの腕をとって、愛し合っている時、彼らは、怒った農夫が鋭いナタを持って、家の中を這って来ているのに気付くませんでした。「不忠実な女め！」彼は妻に叫び、「お前の勝手な不忠実さで、私たちの子どもたちは、痛ましい、受ける必要のない、不公平な運命の犠牲を被った。子どもたちは、復讐と正義のために、泣いていたんだぞ！」農夫は、すばやく鋭いナタを振り下ろし、不忠な妻とその愛人の息の根を止めました。

その時から、農夫は田んぼの世話をもっと心をこめて行ないました。収穫の時が来ると、いつでも、彼は茶色の小さな鳥を追い払わず、ふたりの

子どもの名誉のため、米を食べさせました。やがて、これらの小さな茶色の鳥は、「ブディング」あるいは、「マヤ」として今日知られています。彼らは、フィリピンの田んぼの熟れた米をずっと食べています。